

源氏物語

常夏卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫

源氏物語

常夏

紫式部

與謝野晶子訳

露置きてくれなゐいとど深けれどおも

ひ悩めるなでしこの花

(晶子)

炎暑の日に源氏は東の釣^{つり}殿へ出て涼んでいた。子息の中将が侍して
いるほかに、親しい殿上役人も数人席にいた。桂^{かつら}川の鮎^{あゆ}、加^か茂^も川の石^{いし}
臥^{ふし}などというような魚を見る前で調理させて賞味するのであったが、

例のようにまた内大臣の子息たちが中将を訪ねて来た。

「寂しく退屈な気がして眠かった時によくおいでになった」

と源氏は言つて酒を勧めた。氷の水、水飯などを若い人は皆大騒ぎして食べた。風はよく吹き通すのであるが、晴れた空が西日になるころには蝉の声などからも苦しい熱が撒かれる気がするほど暑気が堪えがたくなつた。

「水の上の価値が少しもわからない暑さだ。私はこんなふうにして失礼する」

源氏はこう言つて身体を横たえた。

「こんなところは音楽を聞こうという気にもならないし、さてまた退屈だし、困りますね。お勤めに出る人たちはたまらないでしょうね。帯

も紐ひもも解かれな^いのだからね。私の所だけででも几帳面きちようめんにせず^にに気楽なふうになつて、世間話でもしたらどうですか。何か珍しいことねむで睡ねむ気のさめるような話はありませんか。なんだかもう老人としよりになつてしまつた気がして世間のこともま^まま^また^たく知らずにいますよ」

などと源氏は言うが、新しい事実として話し出すような問題もなく、皆かしこまつたふうで、涼しい高欄に背を押しつけたまま黙つていた。

「どうしてだれが私に言つたことかも覚えていないのだが、あなたのほうの大臣がこのごろほかでお生まれになつたお嬢さんを引き取つて大事がつておいでになるということを聞きましたがほんとうですか」

と源氏は弁べんの少将に問うた。

「そんなふうに世間でたいそうに申されるようなことでもございませ
ん。この春大臣が夢占いをさせましたことが噂うわさになりました、それか
らひょつくりと自分は縁故のある者だと名のつて出て来ましたのを、
兄の中将が真偽の調査にあたりまして、それから引き取って来たよう
ですが、私は細かいことをよく存じません。結局珍談の材料を世間へ
呈供いたしましたことになったのでございます。大臣の尊厳がどれだ
けそれでそこなわれましたかしれません」

少将の答えがこうであつたから、ほんとうのことだつたと源氏は
思つた。

「たくさんな雁かりの列から離れた一羽までもしいてお捜しになつたのが
少し欲深かつたのですね。私の所などこそ、子供が少ないのだから、

そんな女の子なども見つけたいのだが、私の所では気が進まないのか
少しも名のつて来てくれる者が無い。しかしともかく迷惑なことだつ
ても大臣のお嬢さんには違いないのでしよう。若い時分は無節制に恋
愛関係をお作りになつたものだからね。底のきれいでない水に映る月
は曇らないであらうわけはないのだからね」

と源氏は微笑しながら言っていた。子息の左中將も真相をくわしく
聞いていることであつたからこれも笑いを洩もらさないではいられな
かつた。弁の少將と藤侍とうのじじゅう従はつらそうであつた。

「ねえ朝臣あそん、おまえはその落ち葉でも拾つたらいいだろう。不名誉な
失恋男になるよりは同じ姉妹きょうだいなのだからそれで満足をすればいいのだ
よ」

子息をからかうような調子で父の源氏は言うのであった。内大臣と

源氏は大体は仲のよい親友なのであるが、ずっと以前から性格の相違が原因になったわずかな感情の隔たりはあったし、このごろはまた中将を侮蔑^{ぶべつ}して失恋の苦しみをさせている大臣の態度に飽き足らないものがあつて、源氏は大臣が癪^{しゃく}にさわる放言をすると間接に聞くように言っているのである。新しい娘を迎えて失望している大臣の噂^{うわさ}を聞いても、源氏は玉鬘^{たまかざら}のことを聞いた時に、その人はきつと大騒ぎをして大事に扱うことであろう、自尊心の強い、対象にする物の善^よさ悪さで態度を鮮明にしないではいられない性質の大臣は、近ごろ引き取った娘に失望を感じている様子は想像ができるし、また突然にこの玉鬘を見せた時の歓び^{よろこ}ぶりも思われなくてもない、極度の珍重^{よづめ}ぶりを見せる

ことであろうなどと源氏は思っていた。夕べに移るころの風が涼しくて、若い公子たちは皆ここを立ち去りがたく思うふうである。

「氣樂に涼んで行ったらいいでしょう。私もとうとう青年たちからけむたがられる年になった」

こう言つて、源氏は近い西の対を訪ねようとしていたから、公子たちは皆見送りをするためについて行つた。日の暮れ時のほの暗い光線の中では、同じような直衣姿のうしのだれがだれであるかもよくわからないのであつたが、源氏は玉鬢に、

「少し外をよく見える所まで来てごらんなさい」

と言つて、従えて来た青年たちのいる方をのぞかせた。

「少将や侍従をつれて来ましたよ。ここへは走り寄りたいほどの好奇

心を持つ青年たちなのだが、中將がきまじめ過ぎてつれて来ないのですよ。同情のないことですよ。この青年たちはあなたに対して無關心な者が一人もないでしょう。つまらない家の者でも娘でいる間は若い男にとって好奇心の対象になるものだからね。私の家というものを實質以上にだれも買いかぶっているのですからね、しかも若い連中は六条院の夫人たちを恋の対象にして空想に陶醉するようなことはできないことだったのが、あなたという人ができたから皆の注意はあなたに集まることになったのです。そうした求婚者の真実の深さ浅さというようなものを、第三者になって觀察するのはおもしろいことだろうと、退屈なあまりに以前からそんなことがあればいいと思っていたのがようやく時期が来たわけです」

などと源氏はささやいていた。この前の庭には各種類の草花を混ぜて植えるようなことはせずに、美しい色をした撫子なでしこばかりを、唐撫子からなでしこ、大和撫子やまともことに優秀なのを選んで、低く作った垣かきに添えて植えてあるのが夕映ゆうばえに光って見えた。公子たちはその前を歩いて、じつと心が惹ひかれるようにたたずんだりもしていた。

「りっぱな青年官吏ばかりですよ。様子にもとりなしにも欠点は少ない。今日は見えないが右中將は年かさだけあつてまた優雅さが格別ですよ。どうです、あれからのちも手紙を送つてよこしますか。軽蔑けいべつするような態度はとらないようにしなければいけない」

などとも源氏は言つた。すぐれたこの公子たちの中でも源中將は目だつて艶えんな姿に見えた。

「中将をきらうことは内大臣として意を得ないことですよ。御自分が尊貴であればあの子も同じ兄妹きょうだいから生まれた尊貴な血筋というものなのだからね。しかしあまり系統がきちんとしていて王風おおぎみふうの点が気に入らないのですかね」

と源氏が言った。

「来まさば（おほきみ来ませ婿にせん）というような人もあすこにはあるのではございませんか」

「いや、何も婿に取られたいのではありませんがね。若い二人が作つた夢をこわしたままにして幾年も置いておかれるのは残酷だと思つたです。まだ官位が低くて世間体がよろしくないと思われるのだつたら、公然のことにはしないで私へお嬢さんを託しておかれるという形

式だつていいじゃないのですか。私が責任を持てばいいはずだと思うのだが」

源氏は歎息たんそくした。自分の実父との間にはこうした感情の疎隔があるのかと玉鬢たまかざらひははじめて知った。これが支障になつて親に逢あいうる日はまだはるかなことに思わねばならないのであるかと悲しくも思い、苦しくも思つた。月がないころであつたから燈籠とうろうに灯ひがともされた。

「灯が近すぎて暑苦しい、これよりは篝かがりがよい」

と言つて、

「篝を一つこの庭で焚たくように」

と源氏は命じた。よい和琴わごんがそこに出ているのを見つけて、引き寄せて、鳴らしてみると律の調子に合わせてあつた。よい音もする琴で

あつたから少し源氏は弾^ひいて、

「こんなほうのことには趣味を持っていられないのかと、失礼な推測をしてましたよ。秋の涼しい月夜などに、虫の声に合わせるほどの氣持ちでこれの弾かれるのははなやかでいいものです。これはもったいらしく弾く性質の樂器ではないのですが、不思議な樂器で、すべての樂器の基調になる音を持っている物はこれなのですよ。簡単にやまと琴という名をつけられながら無限の深味のあるものなのです。ほかの樂器の扱いにくい女の人のために作られた物の氣がします。おやりになるのならほかの物に合わせて熱心に練習なさい。むずかしいことがないような物で、さてこれに妙技を現わすということはむずかしいといったような樂器です。現在では内大臣が第一の名手です。ただ清^{すが}

搔^がきをされるのにもあらゆる楽器の音を含んだ声が立ちますよ」

と源氏は言った。玉鬘もそのことはかねてから聞いて知っていた。

どうかして父の大臣の爪音^{つまおと}に接したいとは以前から願っていたことで、あこがれていた心が今また大きな衝動を受けたのである。

「こちらにおりまして、音楽のお遊びがございます時などに聞くことができますでしょうか。田舎^{いなか}の人などもこれはよく習っております琴ですから、気楽に稽古^{けいこ}ができますもののように私は思っていたのでございませうがほんとうの上手^{じょうず}な人の弾くのは違っているのをごさいますようね」

玉鬘は熱心なふうに尋ねた。

「そうですよ。あずま琴などとも言ってね、その名前だけでも軽蔑^{けいべつ}し

てつけられている琴のようですが、宮中の御遊ぎょゆうの時に図書としよの役人に楽器の搬入を命ぜられるのにも、ほかの国は知りませんがここではまず大和琴やまとが真先まっさきに言われます。つまりあらゆる楽器の親にこれがされているわけです。弾ひくことは練習次第で上達しますが、お父さんに同じ音楽的の遺伝のある娘がお習いすることは理想的ですね。私の家などへも何かの場合においてにならないことはありませんが、精いっぱい弾かれるのを聞くことなどは困難でしょう。名人の芸というものはなかなか容易に全部を見せようとしらないものですからね。しかしあなたはいつか聞けますよ」

こう言いながら源氏は少し弾いた。はなやかな音であつた。これ以上な音が父には出るのであろうかと玉鬘たまかざらは不思議な気もしながらます

ます父にあこがれた。ただ一つの和琴わごんの音だけでも、いつの日に自分は娘のために打ち解けて弾いてくれる父親の爪音にあうことができるのであらうと玉鬘はみずからをあわれんだ。「貫川ぬきがはの瀬々せぜのやはらだ」(やはらたまくらやはらかに寝る夜はなくて親さくる妻)となつかしい声で源氏は歌っていたが「親さくる妻」は少し笑いながら歌い終わったあとの清搔すががきが非常におもしろく聞かれた。

「さあ弾いてごらんなさい。芸事は人に恥じていては進歩しないものですよ。『想夫恋』そうふれんだけはきまりが悪いかもしれませんかね。とにかくだれとでもつとめて合わせるのがいいのですよ」

源氏は玉鬘の弾くことを熱心に勧めるのであったが、九州の田舎で、京の人であることを標榜ひょうぼうしていた王族の端くれのような人から教

えられただけの稽古けいこであつたから、まちがつていてはと氣恥ずかしく思つて玉鬘は手を出そうとしないのであつた。源氏が弾くのを少し長く聞いていれば得る所があるであろう、少しでも多く弾いてほしいと思う玉鬘であつた。いつとなく源氏のほうへ膝行いざり寄つていた。

「不思議な風が出てきて琴の音響ひびきを引き立てている氣がします。どうしたのでしょう」

と首を傾けている玉鬘の様子が灯ひの明りに美しく見えた。源氏は笑いながら、

「熱心に聞いていてくれない人には、外から身にしむ風も吹いてくるでしよう」

と言つて、源氏は和琴を押しやつてしまった。玉鬘は失望に似たよ

うなものを覚えた。女房たちが近い所に来ているので、例のような戯談^{だん}も源氏は言えなかった。

「撫子^{なでしこ}を十分に見ないで青年たちは行ってしまいましたね。どうかして大臣にもこの花壇をお見せしたいものですよ。無常の世なのだから、すべきことはすみやかにしなければいけない。昔大臣が話のついでにあなたの話をされたのも今のこのような気もします」

源氏はその時の大臣の言葉を思い出して語った。玉鬘は悲しい気持ちになっっていた。

「なでしこの常^{とこ}なつかしき色を見ばもとの垣根^{かきね}を人や尋ねん

私にはあなたのお母さんのことで、やましい点があつて、それでつい報告してあげることが遅れてしまうのです」

と源氏は言つた。玉鬘は泣いて、

山がつの垣かきほに生おひし撫子なでしこのもとの根ざしをたれか尋ねん

とはかないふうに言つてしまふ様子が若々しくなつかしいものと思われた。源氏の心はますますこの人へ惹ひかれるばかりであつた。苦し
いほどにも恋しくなつた。源氏はとうていこの恋心は抑制してしまふ
ことのできるものでないと知つた。

玉鬘たまかづらの西の対への訪問があまりに続いて人目を引きそうに思われる

時は、源氏も心の鬼にとがめられて間は置くが、そんな時には何かと
用事らしいことをこしらえて手紙が送られるのである。この人のこと
だけが毎日の心にかかっている源氏であつた。なぜよけいなことをし
始めて物思いを自分はするのであろう、煩悶はんもんなどはせずに感情のまま
に行動することにすれば、世間の批難は免れないであらうが、それも
自分はよいとして女のために気の毒である。どんなに深く愛しても春
の女王と同じだけにその人を思うことの不可能であることは、自分な
らも明らかに知っている。第二の妻であることによつて幸福があろ
うとは思われない。自分だけはこの世のすぐれた存在であつても、自
分の幾人もの妻の中の一人である女に名誉のあるわけではない。平凡な
納言級の人の唯一の妻になるよりも決して女のために幸福でないと源

氏は知っているのであつたから、しいて情人にするのが哀れで、兵部ひょうぶぎ卿ようの宮か右大将に結婚を許そうか、そうして良人おとこの家へ行つてしまえばこの悩ましさから自分は救われるかもしれない。消極的な考えではあるがその方法を取ろうかと思う時であつた。しかもまた西の対へ行つて美しい玉鬘を見たり、このごろは琴を教えてもいたので、以前よりも近々と寄つたりしては決心していたことが揺ゆいしてしまうのであつた。玉鬘もこうしたふうに源氏が扱あつかひ始めたころは、恐ろしい氣もし、反感を持ったが、それ以上のことはなくて、やはり信賴のできそうなのに安心して、しいて源氏の愛撫あいぶからのがれようとはしなかつた。返辞などもなれなれしくならぬ程度にする愛嬌あいぎようの多さは知らず知らずに十分の魅力になつて、前の考えなどは合理的なものでないと源

氏をして思わせた。それでは今のままに自分の手もとへ置いて結婚をさせることにしよう、そして自分の恋人にもしておこう、処女である点が自分に躊躇ちゆうちよをさせるのであるが、結婚をしたのちもこの人に深い愛をもつて臨めば、良人おととのあることなどは問題でなく恋は成り立つに違いないとこんなけしからぬことも源氏は思った。それを実行した暁にはいよいよ深い煩悶はんもんに源氏は陥ることであろうし、熱烈でない愛しようはできない性質でもあるから悲劇がそこに起こりそうな氣のすることである。

内大臣が娘だと名のつて出た女を、直ちに自邸へ引き取った処置について、家族も家司けいしたちもそれを軽率だと言っていること、世間でも誤ったしかただと言っていることも皆大臣の耳にははいつていたが、

弁^{べん}の少将が話のついでに源氏からそんなことがあるかと聞かれたことを言い出した時に大臣は笑って言った。

「そうだ、あすこにも今まで噂^{うわさ}も聞いたことのない外腹の令嬢ができて、それをたいそうに扱っていられるではないか。あまりに他人のことを言われない大臣だが、不思議に私の家のことだと口の悪い批評をされる。このことなどはそれを証明するものだよ」

「あちらの西の対の姫君はあまり欠点もない人らしゅうございます。兵部卿^{ひょうぶきょう}の宮などは熱心に結婚したがっていらっしゃるのですから、平凡な令嬢でないことが想像されると世間でも言っております」

「さあそれがね、源氏の大臣の令嬢である点でだけありがたく思われるのだよ。世間の人心というものは皆それなのだ。必ずしも優秀な姫

君ではなからう。相当な母親から生まれた人であれば以前から人が聞いているはずだよ。円満な幸福を持っていられる方だが、りっぱな夫人から生まれた令嬢が一人もないのを思うと、だいたい子供が少ないたちなんだね。劣り腹といって明石^{あかし}の女の生んだ人は、不思議な因縁で生まれたということだけでも何となく未来の好運が想像されるがね。新しい令嬢はどうかすれば、それは実子でないかもしれない。そんな常識で考えられないようなこともあの人はされるのだよ」

と内大臣は玉鬘^{たまかざら}をけなした。

「それにしても、だれが婿に決まるのだろう。兵部卿の宮の御熱心が結局勝利を占められることになるのだろう。もとから特別にお仲がいのだし、大臣の趣味とよく一致した風流人だからね」

と言つたあとに大臣は雲井くもいの雁かりのことを残念に思つた。そうしたふうにだれと結婚するかと世間に興味を持たせる娘に仕立てそこねたのがくやしいのである。これによつても中将が今一段光彩のある官に上らない間は結婚が許されないと大臣は思つた。源氏がその問題の中へはいつて来て懇請することがあれば、やむをえず負けた形式で同意をしようという大臣の腹であつたが、中将のほうでは少しも焦慮しょうりよするふうを見せず落ち着いていたのであつたからしかたがないのである。こんなことをいろいろと考えていた大臣は突然行つて見たい氣になつて雲井の雁の居間を訪ねた。たず少将も供をして行つた。雲井の雁はちよつど昼寝をしていた。薄物の単衣ひとえを着て横たわっている姿からは暑い感じを受けなかつた。可憐かれんな小柄な姫君である。薄物に透いて見える

肌の色がきれいであつた。美しい手つきをして扇を持ちながらその肱ひじを枕まくらにしていた。横にたまつた髪はそれほど長くも、多くもないが、端のほうを感じよく美しく見えた。女房たちも几帳きちようの蔭かげなどにはいつて昼寝をしている時であつたから、大臣の来たことをまだ姫君は知らない。扇を父が鳴らす音に何げなく上を見上げた顔つきが可憐で、頬ほおの赤くなっているのなども親の目には非常に美しいものに見られた。「うたた寝はいけないことなのに、なぜこんなふうな寝方をしてましたか。女房なども近くに付いていないでけしからんことだ。女というものとは始終自身を護まもる心がなければいけない。自分自身を打ちやりしているようなふうの見えることは品の悪いものだ。賢さとしそうに不動の陀だ羅尼らにを読んで印を組んでいるようなのも憎らしいがね。それは極端な

例だが、普通の人でも少しも人と接触をせずに奥に引き入ってばかりいるようなことも、けだか気高いようであまり感じのいいものではない。太政大臣が未来のお后きさきの姫君を教育してられる方針は、いろんなことに通じさせて、しかも目だつほど専門的に一つのことを深くやらせまい、そしてまたわからないことは何もないようにということであるらしい。それはもつともなことだが、人間にはそれぞれの天分があるし、特に好きなこともあるのだから、何かの特色が自然出てくることだろうと思われる。おとな大人になって宮廷へはいられるころはたいしたものだろうと予想される」

などと大臣は娘に言っていたが、

「あなたをこうしてあげたいといういろいろ思っていたことは空想になっ

てしまったが、私はそれでもあなたを世間から笑われる人にはしたくないと、よその人のいろいろの話を聞くごとにあなたのことを思つて煩悶^{はんもん}する。ためそうとするだけで、表面的な好意を寄せるような男に動揺させられるようなことがあつてはいけませんよ。私は一つの考えがあるのだから」

ともかわいく思いながら訓^{いまし}めもした。昔は何も深く考えることができずに、あの騒ぎのあつた時も恥知らずに平気で父に対していたと思ひ出すだけでも胸がふさがるように雲井の雁は思った。大宮の所からは始終逢^あいたいというふうにお手紙が来るのであるが、大臣が気にかけていることを思うと、御訪問も容易にできないのである。

大臣は北の対に住ませである令嬢をどうすればよいか、よけいなこ

とをして引き取ったあとで、また人が譏^{そし}るからといって家へ送り帰すのも軽率な氣のすることであるが、娘らしくさせておいては満足してゐるらしく自分の心持ちが誤解されることになっていやである、女御^{にょご}の所へ来させることにして、馬鹿^{ばか}娘として人中に置くことにさせよう、悪い容貌^{ようぼう}だというのがそう見苦しい顔でもないのであるからと思つて、大臣は女御に、

「あの娘をあなたの所へよこすことにしよう。悪いことは年のいった女房などに遠慮^{きようせい}なく矯正させて使つてください。若い女房などが何を言つてもあなただけではいっしょになつて笑うようなことをしないでお置きなさい。軽佻^{けいちよう}に見えることだから」

と笑いながら言つた。

「だれがどう言いましても、そんなつまらない人ではきつとないと思います。中將の兄様などの非常な期待に添わなかったというだけでしょう。こちらへ来ましてからいろんな取り沙汰などをされて、一つはそれでのばせて粗相そそうなこともするのでございましょう」

と女御は貴女きじよらしい品のある様子で言っていた。この人は一つ一つ取り立てて美しいということのできない顔で、そして品よく澄み切った美の備わった、美しい梅の半ば開いた花を朝の光に見るような奥ゆかしさを見せて微笑しているのを大臣は満足して見た。だれよりもすぐれた娘であると意識したのである。

「しかしなんといっても中將の無経験がさせた失敗だ」

などとも父に言われている新令嬢は気の毒である。大臣は女房を訪たずね

ねた歸りにその人の所へも行つて見た。

座敷の御簾をいっばいに張り出すようにして裾をおさえた中で、五節という生意気な若い女房と令嬢は双六を打っていた。

「しようさい、しようさい」

と両手をすりすり賽を撒く時の呪文を早口に唱えているのに悪感を覚えながらも大臣は従つて来た人たちの人払いの声を手で制して、なおも妻戸の細目に開いた隙から、障子の向こうを大臣はのぞいていた。五節も蓮葉らしく騒いでいた。

「御返報しますよ。御返報しますよ」

賽の筒を手でひねりながらすぐには撒こうとしない。姫君の容貌は、ちよつと人好きのする愛嬌のある顔で、髪もきれいであるが、額

の狭いのと頓狂^{とんきょう}な声とにそこなわれている女である。美人ではないがこの娘の顔に、鏡で知っている自身の顔と共通したもののあるのを見て、大臣は運にのろわれている気がした。

「こちらで暮らすようになって、あなたに何か気に入らないことがありますか。つい忙しくて訪ね^{たず}に来ることも十分できないが」

と大臣が言うと、例の調子で新令嬢は言う。

「こうしていられますことに何の不足があるものでございますか。長い間お目にかかりたいと念がけておりましたお顔を、始終拝見できませんことだけは成功したものは思われませんが」

「そうだ、私もそばで手足の代わりに使う者もあまりないのだから、あなたが来たらそんな用でもしてもらおうかと思っていたが、やはり

そうはいかないものだからね。ただの女房たちというものは、多少の身分の高下はあっても、皆いっしょに用事をしていては目だたずに済んで気安いものなのだが、それでもだれの娘、だれの子ということが知られているほどの身の上の者は、親兄弟の名誉を傷つけるようなことも自然起こってきておもしろくないものだろうが、まして」

言いさして話をやめた父の自尊心などに令嬢は頓着とんじやくしていなかった。

「いいえ、かまいませんとも、令嬢だなどと思召おぼしめさないで、女房たちの一人としてお使いくださいまし。お便器のほうのお仕事だって私はさせていただきます」

「それはあまりに不似合いな役でしょう。たまたま巡り合った親に孝

行をしてくれる心があれば、その物言いを少し静かにして聞かせてください。それができれば私の命も延びるだろう」

道化たことを言うのも好きな大臣は笑いながら言っていた。

「私の舌の性質がそうなんです。小さい時にも母が心配しましてよく訓戒されました。妙法寺の別当の坊様が私の生まれる時産屋うぶやにいたのですってね。その方にあやかっただと言つて母が歎息たんそくしておりました。どうかして直したいと思つております」

むきになつてこう言うのを聞いても孝心はある娘であると大臣は思つた。

「産屋うぶやなどへそんなお坊さんの来られたのが災難なんだね。そのお坊さんの持っている罪の報いに違いないよ。啞おしと吃どもりは仏教を譏そしつた者の

報いに数えられてあるからね」

と大臣は言っていたが、子ながらも畏敬いけいの心の湧く女御にょごの所へこの娘をやることは恥ずかしい、どうしてこんな欠陥の多い者を家へ引き取ったのであろう、人中へ出せばいよいよ悪評がそれからそれへ伝えられる結果を生むではないかと思つて、大臣は計画を捨てる氣にもなつたのであるが、また、

「女御が家うちへ歸つておいでになる間に、あなたは時々あちらへ行つて、いろんなことを見習うがいいと思う。平凡な人間も貴女きじよがたの作法えとくに会得えとくが行くと違つてくるものだからね。そんなつもりであちらへ行こうと思いますか」

とも言つた。

「まあうれしい。私はどうかして皆さんから兄弟だと認めていただきたいと寝ても醒^さめても祈っているのでございますからね。そのほかのことはどうでもいいと思っていதாகらゐでござゐますからね。お許しさえございましたら女御さんのために私は水を汲^くんだり運んだりしましてもお仕えいたします」

なお早口にしゃべり続けるのを聞いていて大臣はますます憂鬱^{ゆううつ}な気分になるのを、紛らすために言った。

「そんな労働などはしないでもいいがお行きなさい。あやかっただお坊さんはなるべく遠方のほうへやっておいてね」

滑稽^{こっけい}扱いにして言っているとも令嬢は知らない。また同じ大臣といても、きれいで、物々しい風采^{ふうさい}を備えた、りっぱな中のりっぱな

大臣で、だれも気おくれを感じるほどの父であることも令嬢は知らない。

「それではいつ女御さんの所へ参りましょう」

「そう、吉日でなければならぬかね。なにいいよ、そんなたいそうなふうには考えずに、行こうと思えば今日にでも」

言い捨てて大臣は出て行った。四位五位の官人が多くあとに従った、権勢の強さの思われる父君を見送っていた令嬢は言う。

「ごりっぱなお父様なこと、あんな方の種なんだのに、ずいぶん小さい家で育ったものだ私は」

ごせち
五節は横から、

「でもあまりおいばりになりすぎますわ、もつと御自分はよくなくて

も、ほんとうに愛してくださるようなお父様に引き取られていらつしやればよかった」

と言った。真理がありそうである。

「まああんた、ぶちこわしを言うのね。失礼だわ。私と自分とを同じように言うようなことはよしてくださいよ。私はあなたなどとは違つた者なのだから」

腹をたてて言う令嬢の顔つきに愛嬌あいきようがあつて、ふざけたふうな姿が可憐かれんでないこともなかった。ただきわめて下層の家で育てられた人であつたから、ものの言いようを知らないのである。何でもない言葉もゆるく落ち着いて言えば聞き手はよいことのように聞くであらうし、巧妙でない歌を話に入れて言う時も、声こゑづかいをよくして、初め終わ

りをよく聞けないほどにして言えば、作の善悪を批判する余裕のない
その場ではおもしろいことのようにも受け取られるのである。強々しこわごわ
く非音楽的な言いようをすれば善いよことも悪く思われる。乳母めのとの懷育ふところ
ちのまままで、何の教養も加えられてない新令嬢の真価は外観から誤ら
れもするのである。そう頭が悪いのでもなかった。三十一字の初めと
終わりの一貫してないような歌を早く作って見せるくらいの才もある
のである。

「女御さんの所へ行けとお言いになったのだから、私がしぶしぶにし
て気が進まないふうに見えては感情をお害しになるだろう。私は今夜
のうちに çık かけることにする。大臣がいらっしゃっても女御さんなど
から冷淡にされてはこの家で立つて行きようがないじゃないか」

と令嬢は言っていた。自信のなさが気の毒である。手紙を先に書いた。

葦垣あしがきのまぢかきほどに侍らはべひながら、今まで影踏むばかりのしるしも侍らぬは、なこそその関をや据すゑさせ給ひつらんとなん。知らねども武蔵野むさしのといへばかしけれど、あなかしこやかしこや。

点の多い書き方で、裏にはまた、

まことや、暮れにも参りこむと思ひ給へ立つは、厭いとふにはゆるにや侍らん。いでや、いでや、怪しきはみなせ川にを。

と書かれ、端のほうに歌もあった。

草若みひたちの海のいかが崎さきいかで相見む田子の浦波

大川水の（みよし野の大川水のゆほびかに思ふものゆゑ浪の立つらん）

青色紙一重ねに漢字がちに書かれてあつた。肩がいかつて、しかも漂つて見えるほど力のない字、しという字を長く氣どつて書いてある。一行一行が曲がつて倒れそうな自身の字を、満足そうに令嬢は微笑して読み返したあとで、さすがに細く小さく巻いて撫子の花へつけたのであつた。廁係りの童女はきれいな子で、奉公なれた新参者であるが、それが使いになつて、女御の台盤所へそつと行つて、

「これを差し上げてください」

と言って出した。下仕えの女が顔を知つていて、北の対に使われてゐる女の子だといって、撫子を受け取つた。大輔という女房が女御の

所へ持って出て、手紙をあけて見せた。女御は微笑をしながら下へ置いた手紙を、中納言という女房がそばにいて少し読んだ。

「何でございますか、新しい書き方のお手紙のようでございますね」
となお見たそうに言うのを聞いて、女御は、

「漢字は見つけないせいかしら、前後が一貫してないように私などには思われる手紙よ」

と言いながら渡した。

「返事もそんなふうにたいそうに書かないでは低級だと言って軽蔑けいべつされるだろうね。それを読んだついでにあなたから書いておやりよ」

と女御は言うのであった。露骨に笑い声はたてないが若い女房は皆笑っていた。使いが返事を請求していると言ってきた。

「風流なお言葉ばかりでできているお手紙ですから、お返事はむずかしゅうございます。仰せはこうこうと書いて差し上げるのも失礼ですし」

と言って、中納言は女御の手紙のようにして書いた。

近きしるしなきおぼつかなさには恨めしく、

ひたちなる駿河するがの海の須磨すまの浦に浪立ちなみいでよ箱崎はこざきの松

中納言が読むのを聞いて女御は、

「そんなこと、私が言ったように人が皆思うだろうから」と言つて困つたような顔をしていると、

「大丈夫でございますよ。聞いた人が判断いたしますよ」

と中納言は言つて、そのまま包んで出した。新令嬢はそれを見て、

「うまいお歌なこと、まつとお言いになったのだから」

と言つて、甘いにおいの薫香くんこうを熱心に着物へ焚たき込んでいた。紅べにを

赤々とつけて、髪をきれいなでつけた姿にはにぎやかな愛嬌あいきょうがあつ

た、女御との会談にどんな失態をすることか。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
